

滋賀会館

所在地
構造規模
基礎地業

大津市京町三丁目4 - 2 2
SRC造地上4階地下1階
栗石基礎地下耐圧版工法

延床面積 8,772.408㎡
工期 昭和28年4月～昭和29年4月



滋賀会館は、以前建設地にあった滋賀県産業会館の火災による再建計画と滋賀県公会堂、図書館の建設計画を一体の計画として建設されたものであり、当時県の文化産業の発信地として活用された。館内には、ホテル、結婚式場をはじめ、貸事務所も配置されていた。建物の構造は、当時では県下でも珍しい鉄骨鉄筋コンクリート造の建築で、設計、施工とも県外の業者によるものであった。建設時には県民の大きな期待を集め、開館には皇族を招き、こけら落としもNHKとんち教室の公開放送が催された。

琵琶湖文化館

所在地
構造規模
基礎地業

大津市打出浜1 - 1
SRC造地上6階地下1階
栗石基礎地下耐圧版工法

延床面積 4,792.575㎡
工期 昭和35年4月～昭和36年3月



当施設は、滋賀県の観光と文化産業の拠点として、琵琶湖水面に浮かぶ城をイメージした外観で県内外を問わず多くの来館者に親しまれている。管内には、博物館、美術館をはじめ、琵琶湖淡水魚を観察できる水族館も設けられており、最上階には琵琶湖を眺められる水上展望閣もあって、滋賀の観光に大きな役割を果たしてきた。

建設は水面からの工事施工で始められた難工事であったが、設立にあたって県内の文化産業団体等から多くの寄付が集まったほか、展示物の多くも各分野からの寄贈によるものであり、県民の期待が大きなものであったことが伺える。

(当施設の水族館機能は、平成9年度の改修によって全面琵琶湖博物館に移転された。)

新設高等学校 4 校 (昭和 38 年度・米原、能登川、守山、石山)

建設の経緯

戦後の第 1 次ベビーブームによる高等学校就学生が県下でも多くなったことと、高等学校への進学率が高くなったことから県内地区別にそれぞれ普通高等学校を新設することとなった。建設については工事の緊急性もあり県内業者のほか県外中堅業者にも発注された。工事監理は建築課職員が現場常駐で行った。

米原高等学校

所在地 坂田郡近江町 1 2 0 0 (現米原市)

構造規模 R C 造 3 階

延床面積 3, 6 1 7 . 1 9 m²



能登川高等学校

所在地 神崎郡能登川町伊庭 1 3 (現東近江市)

構造規模 R C 造 3 階

延床面積 5, 1 2 7 . 5 5 1 m²



守山高等学校

所在地 守山市守山三丁目12-34
構造規模 RC造3階
延床面積 4,936.72㎡



石山高等学校

所在地 大津市国分一丁目15-1
構造規模 RC造3階
延床面積 5,120.50㎡



県立短期大学工業部建築科校舎

所在地
構造規模
基礎地業

彦根市八坂町1900
RC造地上3階
既製鉄筋コンクリート杭

延床面積 836.95㎡
工期 昭和38年4月～昭和39年3月



県内における産業関係学府として彦根市東沼波に設置されていたものが付属高等学校との利用から手狭になってきたため、犬上川の琵琶湖河口近接地に全面移転することとなり、第一期として建築科が建設された。

建築デザイン計画は当時では新しい方法の黄金分割の手法に基づくモジュール設計を採用し、さらに仕上げの仕様もコンクリート型枠打ち放しで構造軸組を表現したとし、新設の校舎が建築教材としても有効に生かされたものであった。建設後30年を経て、4年制県立大学として発展的閉学に至るまで多くの建築技術者を世に送った。

県職員会館

所在地
構造規模
基礎地業

大津市京町四丁目1-1
RC造地上4階地下1階
既製鉄筋コンクリート杭

延床面積 4,792.575㎡
工期 昭和38年10月～昭和40年3月



主として県庁職員の厚生施設および関係事務を集約するために建設され、職員互助会・組合等の諸室、図書室、音楽室、サークル室等のほか教育委員会関係各課が配置された。また、主要な会議・講演会等のため大会議室も設けられ広く活用された。そのほか、建設地が県庁舎本館と市道を挟む位置にあるため、雨天時にも快適に移動できるよう地下道が設けられた。

希望ヶ丘文化公園・青年の城

所在地
構造規模
基礎地業

蒲生郡竜王町薬師 1 1 7 8
RC造地上 8 階（青年の城）
既製鉄筋コンクリート杭

延床面積 1,064.68㎡
工期 昭和 43 年～昭和 44 年



滋賀県の豊かな自然景観を生き、青少年の健全な育成を中心に広域的な郎市近郊緑地を設置することを主眼に、昭和 4 4 年「希望ヶ丘文化公園」が設置され、順次施設整備が進められた。公園の総面積約 4 2 8 ヘクタールを文化ゾーン、野外活動ゾーン、スポーツゾーンの三つにわけ、その核となる青年の城は文化ゾーンに施設管理部門と青少年宿泊研修部門を併せて建設された。建物の中心には、既に解体されているが、宿泊用カプセルルームを取引付けた塔状の建物がありランドマークにもなっていた。

その他の宿泊室は研修部門に続けた低層部分でまとめられており、エントランスロビーは吹き抜けの大空間で自然光を取り入れるガラス屋根が連なっている。

県立養護学校（現：八幡養護学校）

所在地
構造規模
基礎地業

近江八幡市浅小井町 6 9 9
RC造地上 1 階
既製鉄筋コンクリート摩擦杭

延床面積 3,084.31㎡
竣工 昭和 44 年 3 月



初の県立養護学校として、通学のほか宿泊収容が出来るよう計画された施設である。敷地内高低差を極力少なくし、建物も平屋建で、便所は教室に近接した配置としたり、廊下等も極力広く、生徒児童のほふく移動等にも容易なものとしたりと、様々な配慮がされた。工事施工においては、低層でありながら広い範囲に施設配置となっていることや、敷地との高低差を少なくしたことによる湿潤対策を図っている。

県下で初めての養護福祉施設でもあり、開校後も後から建設される同様施設の参考とされた。

県立体育館

所在地
構造規模
基礎地業

大津市におの浜四丁目2-12
RC、S造地上2階
既製鉄筋コンクリート杭

延床面積 7,918.99m²
竣工 昭和45年10月



県民の体力づくりや各種の室内競技への参加を勧めるとともに、主要大会の開催が可能となるよう県立施設として建設された。メインアリーナはバレー、バスケットのほか、各種室内競技の出来る機能を持ち、競技観戦には4周にスタンドが配置されている。

工事の施工においては、大津湖岸の埋め立てによって造成された敷地で埋め立て後の早い時間での着工でもあり、基礎杭の施工においては難工事であった。アリーナを覆う大屋根の鉄骨工事においては接合部がリベット打ちであり、リベット工の妙技によって施工された。

彦根総合庁舎・消費生活センター

所在地
構造規模
基礎地業

彦根市元町4-1
RC造地上3階
場所打ちコンクリート杭

延床面積 4,302.00m²
竣工 昭和46年3月



彦根市内にあった県行政機関を集約し合同庁舎とするとともに、あらたに県民の消費生活トラブル処理等の機関を一体庁舎として旧大蔵省印刷局舎、工場の移転による跡地に建設された。周辺環境は城下町でもあり、新しい中にも古風な雰囲気計画に表現している。

県民が直接訪れる施設でもあり、1、2階に県事務所を、3階に土木事務所を配置し、入り口に近い部分には消費生活センターを配置した。隣接地に彦根市役所が建設されており、空調設備熱源は共用設置とし省エネルギーに対応できるよう計画されている。

水産試験場

所在地
構造規模
基礎地業

彦根市八坂町 2 1 3 8 - 3
R C 造地上 2 階
既製鉄筋コンクリート節つき摩擦杭

延床面積 1, 2 5 5 . 9 8 m²
竣 工 昭和 46 年 6 月



彦根市内の松原町にあった旧施設を犬上川河口の琵琶湖に接した当地へ全面移転したものである。琵琶湖の淡水魚について漁獲から増殖までの試験研究と調査等のほか、水産業の指導育成をすすめることが主な業務である。

建物は、2階建の本館に試験室、実験室、研修室等をまとめ、琵琶湖岸に隣接した敷地内には各種の養魚池や観室用水槽、小学生等の見学のために見学水槽を設けられ、教育機関としての役割も果たしている。施工にあたっては湖岸の砂地盤のため、基礎工事における支持層確保等に苦労があった。

彦根工業高校

所在地
構造規模
基礎地業

彦根市南川瀬町 1 3 1 0
R C 造地上 4 階
6, 5 6 8 . 2 4 m²

延床面積 6, 5 6 8 . 2 4 m²
工 期 昭和 45 年 9 月 ~ 昭和 47 年 6 月



彦根市内の東沼波町にあった旧施設を、市南部郊外地の現在地へ全面移転したものである。従来地の狭溢さに比べ新しい敷地は周囲が農地であり、建物の配置計画にも将来を見越した十分な計画がなされた。

工業高校の特性から、実習工場の整備や高圧受電にも新しい配慮がされた。建築には柱梁の構造体とコンクリート小幅板型枠打ち放しが使用され、腰壁の吹付タイルとの対比もあって、まとまった外観を呈している。

工事にあたっては、校舎移転の期限にも追われながら、期限内竣工に向けての関係者の努力があった。

繊維工業指導所（現：東北部工業技術センター管理課・技術第一課）

所在地
構造規模
基礎地業

長浜市三ツ矢元町 27 - 39
RC造地上2階
既製鉄筋コンクリート杭

延床面積 873.19㎡
工期 昭和47年3月



県内の繊維産業の指導研究機関として、絹織物をはじめとする繊維工業の盛んな湖北地方で中心的な役割を担っていたが、試験工場棟も木造で老朽化していたことと試験研究の高度化、多様化に対応することをめざし全面改築されたもので、市街地周辺環境にあったデザイン上の配慮がなされている。

建築工事は既存施設を一部使用しながらの工事となったため、調整に苦慮しながらの施工であった。

県立短期大学農学部

所在地
構造規模
基礎地業

草津市西渋川二丁目 8 - 4
RC造地上4階
既製鉄筋コンクリート杭

延床面積 3,370.62㎡
竣工 昭和48年8月



既存校舎の老朽化に伴い順次改築をすすめることとし、最初に管理部門の本館棟を建築することとし、設計は課内設計で建築課職員で実施した。

建替工事1期にあたり、設計には入念なデザイン計画が求められ、設計チームが日夜協議検討のうえ大学にふさわしい建築計画が完成した。校舎の中心となる建物にシンボルとして時計塔を備えた風格のある建物となっている。